

地域連携インフラに育った「SUZUKA産学官交流会」

—産と学から始まった、民間主導の産学官交流会10年の歩み—

株式会社百五経済研究所 地域調査部部长 中畑 裕之



三重県鈴鹿市、鈴鹿サーキットがあり自動車レースの最高峰F1の街として国内外に有名である。2007年に続き2008年は富士スピードウェイでF1日本グランプリが開催されるが、2009年は鈴鹿サーキットで開催される予定で、地元はF1再開に向けて盛り上がりを見せている。

同市の人口は約20万人ながら、2006年の製造品出荷額等は2兆2百億円と全国有数の工業都市である。本田技研工業鈴鹿製作所や旭化成ケミカルズ、AGF鈴鹿、富士電機などの工場が立地し、その周辺に協力企業や独自技術を持つ企業が集積する、ものづくりのまちである。

このまちでSUZUKA産学官交流会が生まれて10年、産学官の連携インフラに育った同会の歩みと活動を紹介したい。

契機は産業界の危機感

1990年代後半、大手製造業の海外移転・製造業の空洞化が、日本の危機として捉えられていたが、同市の経済界にとっても現実の危機であった。行政の動きを待ってはいないと感じた鈴鹿商工会議所では独自に、会員を委員とするACT SUZUKA21委員会で「すずか産業振興アクションプログラム」を策定し、産学交流による新産業・新技術の創出を掲げた。私もこの委員会の委員として参加させていただき、楽しく、大いに勉強となったことを記憶している。

このアクションプログラムの大きな柱として産学交流に取り組むこととなり、産学交流会の立ち上げを同会議所が鈴鹿工業高等専門学校（以下鈴鹿高専）、鈴鹿国際大学、鈴鹿医療科学大学に呼びかけ、1999年に発足した。このため、当初県・市等の行政機関はオブザ

ーバー参加で、「SUZUKA産学交流会」と名前に「官」が入っていなかった。県・市と鈴鹿の産学の信頼関係が格段に進んだ今となっては笑って話せる語り草である。

人的交流とともに進展した産学官の協働

当初は商工会議所も高等教育機関も肩に力が入り、早く共同研究を立ち上げようと研究会活動に取り組んだが、なかなか視点が定まらない状況があった。しかし、大学・高専を見学し、フォーラム・交流パーティーを開き、視察会を重ね、人的交流が深まる中で、次第に研究者のシーズと企業のニーズが結びつき、シャクヤクの抗菌性に着目した商品開発や植物を利用した屋上・壁面・駐車場の緑化などのプロジェクトが始動した。



視察研修会（H18.10.11）

また、当初オブザーバーとして参加していた鈴鹿市職員も、企業経営者や高等教育機関の研究者・事務局と交流する中でニーズを掴み、市の施策に反映する動きにつながった。特に2003年は大きな変化の年となり、行政機関を正式に交流会メンバーとして迎え、SUZUKA産学官交流会へと会の名前も変わった。

まずできたのが、「鈴鹿市ものづくり研究開発事業補助金」で、新商品または新技術の

研究開発を大学等と共同研究やその指導を受けて行う中小製造業者等を対象としている。これは中小事業者が大学等と共同研究を行う足がかりとなっただけでなく、市が産学連携を積極的に支援していることを示すことにもなった。

また、鈴鹿市では市としてものづくり産業のビジョンを策定する必要があると考えようになり、「鈴鹿市ものづくり政策のあり方検討会」を設けた。この検討会では、SUZUKA産学官交流会のメンバーも検討委員として参画し、意見・提案を行った。

この検討会の提言として、立地企業に対する持続的企業活動に向けた支援、待っているのではなく企業に「動くサポート」を行うこと、高等教育機関と連携した人材育成・ものづくり現場を生かした人材育成、環境産業の育成、少子高齢社会・健康福祉を意識した産業展開、等がなされた。

これらの提言のいくつかは実現し、企業OBを組織化した「鈴鹿市ものづくり動く支援室」が鈴鹿市役所と鈴鹿商工会議所の協力で作られ、地域中小製造業に具体的な支援を行っている。また、経済産業省の「高専等を活用した中小企業人材育成事業」を鈴鹿商工会議所を事業管理者とし、鈴鹿高専とSUZUKA産学官交流会、そして「鈴鹿市ものづくり動く支援室」との連携活動の下で獲得し、「ものづくり人材育成セミナー」を平成18年度以降、鈴鹿高専や企業の現場を利用して開催している。環境産業でも車の100%リサイクルを目指す「協同組合三重オートリサイクルセンター」が約4万㎡という広大な敷地を有して、2005年に操業した。

定着した活動

同交流会の2007年度事業から主な活動を拾い上げると、鈴鹿高専、鈴鹿国際大学、鈴鹿医療科学大学での「産学官交流フォーラム・交流パーティー」、一般の方も入れる「オープン例会」、経済産業省の高専等を活用した中小企業人材育成事業「ものづくり人材育成セミナー」、「会員企業訪問」、1泊を伴う「視察研修会」、リーディング産業展みえへの出展、研究者等の情報提供の後意見交換等を行う「産学官技術サロン」、研究会（環境植物研究会）、研究開発相談・支援（健康玩具、シャクヤクを使った機能性学生服、中水用貯溜槽の研究開発）等となっており、年間を通じて非常に活発な活動が行われている。産学官交流会の活動・研究から生まれた特許や製品も表れ、徐々に目に見える成果が出始めた。



シャクヤク抽出の抗菌成分を含む糸で作られた鈴鹿高専の制服

産学官交流フォーラム（鈴鹿国際大学）（H19.11.30）

商工会議所のロビーや大学等の研究室、市役所のミーティングコーナーで、事業者・技術者と研究者、市職員、商工会議所職員が次のプロジェクトや研究開発、まちづくりについて対等に話し合い、笑い、頭をかきむしっている（私もその一員であるが）、そのような姿を日常的に見ることができ鈴鹿市はきっと面白い街になると思う。